白い世界

状況解除ーー
　遠吠えのような喇叭の音が、入道雲がそびえる夏の空に吸い込まれていく。
　遠藤は控えていた部下に敬礼をすると天幕を出た。蒸し暑い天幕の中から外へ出ると、真夏の炎天下であるというのに爽やかな風が遠藤の鼻先を撫でる。
　終わったのだーー遠藤は誰にも気づかれない小さなため息を喉の奥で殺した。
「恐ろしい人です、あの人は」
　するりと遠藤の後を追って天幕から出てきた部下が、口惜しげに呟く。
「気が付いたら取り囲まれて、喉笛を切られる感じでした」
「実際そうされたんだ」
　彼らはこの国の軍人である。ーーいや、軍人とは国が認めていないーー世界では認知されているけれども。
　それは、まだ実戦を経験したことのない、珍しい存在の軍隊であった。経験はないが、演習は繰り返し行われており、今日もこうして市街地を模した演習場の中で、戦いあっていたのだった。
　遠藤は歩兵中隊を束ねる大尉だ。彼の今日の敵の大将は、最近海外留学から帰ってきたばかりという男である。
　彼は、遠藤の同期であった。
　天幕から抜け出た時の清涼感がなくなるころ、その同期が遠藤の虚ろな眼前に姿を現した。
　強い日差しの下で、市街地戦用の灰色の戦闘服は空間の染みのように見える。同期の目元は鉄帽の濃い影に隠れてしまい表情は分からなかったが、口元には薄い笑みが浮かんでいるようであった。
　彼が歩を進めると、背負っている小銃がリズムを刻む。
「外山」
　遠藤がその名を懐かしげに呼ぶと、彼は鉄帽を脱いだ。
　鋭利で冷淡な視線が、真夏の太陽をも駆逐するようであった。この目に負けたのであれば、もう遠藤には何も言うことはなかった。
実戦さながらの演習は、遠藤の完全な敗北で終わった。
　要所に配置された外山の兵らは、遠藤の部隊がどこへ逃走しようとも彼らの姿を射程内に納めていた。どういうわけか、ふらりと現れ気まぐれに銃を撃ち、いつの間にかそこにいないという具合である。気が付けば戦闘部隊は全滅させられ、作戦を指揮する遠藤ら数人しか残らない始末ーーいや、司令部も吹き飛ばされた。天幕の中に転がってきた手榴弾のペイントは外山部隊のものであった。それがいつも不発弾とは限らないのだ。
　しかし、遠藤が弱いのではない。外山はいつもそうであった。彼はいつでも敵を完膚なきまでに叩きつぶす。冷酷で効率のよい戦闘には彼らの組織の中でも定評があり、この国としては珍しく同盟国の軍へ留学を果たすほどだ。そして、その戦場を経験しながらも、生きて帰ってきてい

るのである。
　派遣前に、死ぬかもしれないという条件が提示された外山は
「誰に物を言っているのか」
　そう返答したという噂が流れるほど、良くも悪くも注目を集める男であった。